

Kālikā-purāṇa にみられるサティー伝説

前 田 知 郷

1. 問題の所在 サティーはシヴァの妃、ダクシャ¹⁾の娘として知られ、後にシヴァの 2 番目の妃パールヴァティーとして生まれ変わる。ダクシャの催す犠牲祭にサティーとシヴァは招かれず、そのことにサティーは嘆き悲しみ、ヨーガの力によって自らの体内に火を生じ死ぬとも、あるいは自ら祭火の中に身を投げ死ぬともいわれる。シヴァはサティーの亡骸を肩にかつぎ国中を歩き回り死のダンスを踊り続ける。それを見た神々は世界の破滅を恐れ、ヴィシュヌはサティーの亡骸を切り刻む。その破片は各地に散らばり、その落ちた場所は Śakta-pīṭha (女神の霊場) と呼ばれ、そこから多くの女神が誕生する。この伝承は Śakta-pīṭha の起源を説明する重要な神話であるとともに、ヒンドゥー社会における未亡人の自殺行為の慣習とも関連づけられた神話でもある。「サティー」とは貞淑な女性を意味している。夫への献身を示すため、亡くなった夫の遺体を焼く薪の上で夫とともに生きながら焼かれ死んでいく女性のことをサティーとも呼ぶ。ヴェーダ時代にすでにサティーの慣習は存在したが、その慣習は夫を失った妻が火葬の薪の上にのぼり、夫の遺体のそばに横たわるという死の模倣にすぎなかったともいわれる。

サティーの記述は *Atharva-veda*(18.3.1.)²⁾ にみられるが、それは女神サティーのことではなく慣習としてのサティーについてのものである。ヴェーダ期には、シヴァの姉妹あるいは妻に関する記述は多数存在するが、それらがサティーやパールヴァティーと結び付けられることはほとんどなかった³⁾。サティーの詳細が語られ始めるのは 2 大叙事詩とプラーナ時代においてである。女神崇拜の源流ともいえるサティーが、シャクティ崇拜の普及を目的として編纂された *Kālikā-purāṇa* (KP) の中でどのように語られているのか、本稿では特にサティーの誕生とサティーの死という 2 点について考察する。

2. *Kālikā-purāṇa* について KP は *Kālī-purāṇa* と呼ばれ⁴⁾、18 ウパ・プラーナ⁵⁾ の 1 つであり、Śakta-pīṭha を伝えるプラーナ文献として知られる。初期の KP は

およそ7世紀に編纂され、この時期のものはシャクティへの賛美と崇拜、そしてシヴァへの賛美を普及させることが目的であり、密教的要素は盛り込まれていなかった⁶⁾。現存する *KP* は、密教的要素を多分に盛り込み、シャクティ崇拜、特にカーリー崇拜を普及させることまたカーリーの偉業を伝えることを目的として10世紀あるいは11世紀に編纂される⁷⁾。*KP* は膨大なプラーナ文献の中で重要な位置を占め⁸⁾、他の多くの文献⁹⁾ から影響を受けている。*KP* では第8章から第18章までがサティールに関連した章である。

3. サティールの誕生 *KP* で最も特徴的なことはダクシャがカーリーを崇拜し、そのカーリーがダクシャの娘として生まれるということである。カーリーは血を好み戦闘的で、破壊や殺戮そして死との関わりをもつ恐ろしい女神である。*KP* のカーリーは、黒色の肌でライオンの上に座り、ふくよかな胸、愛らしい顔、赤い両目、美しい髪をもち、腕は4本あり、1本目には青い睡蓮 (utpala)、2本目には剣を持ち、残りの2本で varada (恩恵を与える) と abhayada¹⁰⁾ (安心を与える) のポーズをとり (8.9-11.)、優しく穏やかな様相を呈している。しかしそこには黒い肌の色、赤い目、剣などによってカーリーの血や恐ろしさを表現している。また、カーリーはダクシャの娘として生まれ、シヴァの妃になることを約束するが、ダクシャがカーリーへの献身を怠れば、人間としての身体を放棄すると告げる (8.32-34.)。この約束は、カーリーへの献身を促す目的に加え、カーリーのイメージである死 (破壊) との関連性を示唆しているように思われる。従来の伝承ではダクシャのシヴァとサティールへの冷たい仕打ちに嘆き、サティールは自ら命を絶つ。この彼女を死へと至らしめる理由を *KP* はさらに加えるのである。つまり、サティールの死に二重の意味を付するのである。ダクシャはカーリーに対する献身的な態度を約束するが、この約束を違えることは娘を失うことと直結してしまうのである。サティールの誕生に際して、カーリーの戦闘的性格を暗示しつつも彼女の偉大さと優美さを描きだしている。

4. サティールの死 サティールはヨーガの姿勢をとり身体のすべての扉を閉めた。識別できないほどの音 (sphota) を発し、それにより10番目の扉を閉じ死へと至った (16.48-50.)。すべての扉とは両目、両耳の穴、鼻孔、口、肛門、性器を意味し、10番目の扉とは頭蓋骨の中にあるとされる穴を意味する。一般的にサティールは火に焼かれることにより死へと至るが、*KP* では火という表現はない。しかし、ヨーガはタパスと関係する。タパスは苦行だけでなく熱つまり内的な火をも意味する。つまり、ヨーガの姿勢をとることは火の中へ身を投じることへと通ずるのである。

一方で、人体に存在する 10 の孔を閉ざすことによって彼女が死に至るという描写は KP 特有のものであると思われる。また KP には、デーヴィークータ、ウッディヤーナ、カーマギリ、ジャーランガラ、プールナギリ、カーマルーパという Śakta-piṭha が列挙されている (18.41-43.)。

5. 結語 女神信仰の台頭に伴い、優美さをもつ女神たちに加え、恐ろしさをもつ女神たちが登場する。KP では、サティーがカーリーのこの世における顕現であることににより、サティーのもつ優美さとカーリーのもつ恐ろしさなどの互いの性格を巧みに絡ませ、優しさだけではなく両面性をもつ女神サティーを誕生させる。こうした操作により、死後、身体の破片が様々な女神の霊場として重要な役割を果たすという従来のサティーの伝承は、5-6 世紀に編纂されたと思われる *Devimahātmya* において一気にその存在を知らしめたカーリーの地位を、さらに確立させる効果ともなりえたのである。またサティーとカーリーという互いに相反する性格をもつ女神を一对のものとすることは大女神デーヴィーへの統合も示唆されているように思われる。

略号および使用テキスト

KP = The *Kālikā-purāṇa* Vol.1-3, Shastri, B. N. (1991). Nag Publishers.

- 1) ダクシャは生類の主 (ブラジャーパティ) と呼ばれ、ブラフマーの息子である。ヴェーダにおいてはダクシャの母親はアディティとされる。G. Flood, *An Introduction to Hinduism*, Cambridge University Press, 1996, p.150.
- 2) Margaret & James Stutley, *A Dictionary of Hinduism*, London: Routledge & K. Paul, 1985, p.273.
- 3) D. Kinsley, *Hindu Goddesses — Vision of the Divine Feminine in the Hindu Religious Tradition* —, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1998, p.36.
- 4) KP は *Kālī-purāṇa* と呼ばれるが、*Kālī-purāṇa* は現存する *Kālikā-purāṇa* とは異なる作品であり、*Kālikā-purāṇa* よりも早い時期に成立したものであるという見解が主流である。B. N. Shastri, *Kālī-purāṇe Mūrtivinirdeśaḥ*, New Delhi: India Gandhi National Centre for the Arts, 1994, pp.13-16.
- 5) プラーナはマハー・プラーナ (18 種) とウパ・プラーナ (18 種とその他) に分類される。マハー・プラーナは *Vāyu*, *Brahmāṇḍa*, *Viṣṇu*, *Matsya*, *Mārkaṇḍeya*, *Bhāgavata*, *Kūrma*, *Agni*, *Vāmana*, *Varāha*, *Skanda*, *Liṅga*, *Garuḍa*, *Brahmavaivarta*, *Nāradiya*, *Bhaviṣya* である。しかし *Vāyu-purāṇa* は *Śiva-purāṇa* に替わることもある。Sanatkumāra, Narasimha, Brhannāradiya, Kapila, Vāmana, Bhārgava, Varṇa, Kālikā, Sāmba, Nāndi, Sūrya, Vaiṣiṣṭa, Devī-Bhāgavata, Gaṇesa, Hamsa, Sivarahasya, Durvasa, Parasara が 18 ウパ・プラーナである。

- V. Nath, *Purāṇa and Acculturatio — A Historico-Anthropological Perspective —*, Munshiram Manoharlal Publishers, 2001, p.1.
- 6) B. B. Hansa, *A Critical Study of Mahābhagavadpurāṇam*, Delhi: Bharatiya Kala Prakashan, 2004, p.123.; K. R. V. Kooij, *Worship of the Goddess According to the Kālikā-purāṇa*, Leiden E. J. Brill, 1972, p.3.
- 7) B. N. Shastri, 1991, p.12.; K. R. V. Kooij, loc. cit.
- 8) R. C. Hazra, *The Kālikāpurāṇa*, Poona: ABOL1, Vol.22, part1-2, pp.1-23., 1941, pp.2-3.
- 9) 特に *Bhagavadgītā*, *Kirātārjunīya*, *Bhāgavata-purāṇa*, *Viṣṇu-purāṇa*, *Kālidāsa*, *Bhaṭṭi*, *Māgha*, *Bharṭhari* などの影響を受けている。B. N. Shastri, 1994, p.26.
- 10) *KP* では abhayada となっており, 安心 (abhaya) を与える (da) という意味である。通常 abhaya と表現される。

参考文献 (引用文献を除く)

- Hawley, J. S. & D. M. Wulff (1998). *Devī Goddesses of India*, Delhi : Motilal Banarsidass Publishers.
- Madhavananda, Swami & R. C. Majumdar (1997). *Great Women of India*, Advaita Ashrama.
- Sircar, D. C.(1973). *The Śākta Pīṭhas*, Delhi : Motilal Banarsidass Publishers.
- 立川武蔵, 石黒淳, 菱田邦男 & 島岩 (1980). 『ヒンドウの神々』せりか書房

〈キーワード〉 サティー, カーリー, *Kālikāpurāṇa*

(愛知学院大学大学院)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (4)

〈大乘涅槃經〉と三昧經典

下田 正弘 (東京大学)

大乘仏教菩薩の原像

高橋 審也 (武蔵野大学)

スリランカにおける大乘仏教碑文の書体とその過程

Labugama Narada (東京大学大学院)

According to legend, Shinran's 親鸞 mother was the daughter of Minamoto Yoshiie's 源義家 legitimate son Yoshichika 義親. There is a strange story which was created in recent times that it is possible she was born in the extension at Tsūbō-ji. It is said that Yoshichika committed murder and mayhem hither and yon until subdued in January 1108 by Taira no Masamori 平正盛, grandfather of Taira no Kiyomori 平清盛. If we suppose this daughter was born in 1108, since Shinran was born in 1173, her mother would have given birth at age 65.

155. The legend of Satī in the *Kālikā-purāṇa*

Chisato MAEDA

Satī is a daughter of Dakṣa and a wife of Śiva. Dakṣa celebrated a festival of sacrifice, but did not invite Satī or Śiva. Hence, she was racked with grief and perished by throwing herself into a fire. The gods hacked to pieces her dead body. The fragments of her dead body fell down everywhere. Those places, in which many goddesses were born, have been called Śākta-pīṭha. The legend of Satī is an important myth that explains the origin of Śākta-pīṭhas. Moreover the legend is related to the custom of widow suicide in Hindu society.

How is Satī described in the *Kālikā-purāṇa* which was composed to spread Śakti's worship? In this paper I address two points, the birth and the death of Satī.

156. The Cakravartins in the Jain Carita Literatures

Tomoyuki YAMAHATA

The *Hariseṇacarī* (Skt. *Harīṣeṇacarita*) is an example of Apabhraṃśa narrative literature and Hariṣeṇa is one of the twelve Cakravartins in the Sixty-three Jain Great Men (Śālākā/Mahā-puruṣas). Though the Jain features of the cakravartin basically correspond with Buddhist ideas, there are various differences. Particularly, the Buddhist cakravartins are the sovereign of this